

# 中國小說史略考證 第十七續

中 島 長 文

4 補 「小説的歴史的變遷」第五講云、「西遊記」現在所見的、是一百回、先叙孫悟空成道、次叙唐僧取經的由來、後徑八十一難、終于回到東土。

5 惟楊志和本、以至（第六回下「小聖施威降大聖」）

一三二八

寫印本『大略』十二には、この箇處に該當する部分はない。鉛印本『大略』十六「明之神魔小説」（下）とは「僅有三百餘言」の「有」字がない他は、すべて『史略』と一致する。なお引用文中「只有一間小廟」の「廟」を鉛印本から三八年版全集まですべて「屋」に作り、五七年版全集で「廟」に改められた。ほとんどの版本がすべて「廟」に作り、文意からもその方が通じやすいからであろう。「屋」に作るテキストは未見。「小説的歴史的變遷」の記述は第一六篇6に已引。

魯迅は第十六篇で、四遊記を『西遊記』に先立つものと考え、その中の楊志和本『西遊記傳』を百回本『西遊記』（具體的には亞東版『西遊記』）の直接の祖本としたため、ここでも同じ叙述を繰返している。楊志和本『西遊記傳』

が、たとえば世徳堂本『西遊記』に先行するものでないならば、少くともこの傳承關係を示す記述は訂正されなければならぬ。(第一六篇1参照)。

「西遊故事」については、當時知り得た材料を種々紹介した『小説舊聞鈔』での魯迅の案語がある(第十六篇6已引参照)。なおその後『永樂大典』に引用された「夢斬涇河龍」(世徳堂本では第九・十回到相當)や、『銷釋眞空寶卷』さらには十四世紀に成つたと考えられる朝鮮での中國語教科書である『朴通事諺解』への「西遊故事」の引用などが明らかにされ、『西遊記』成立の過程が『史略』執筆の當時よりも格段に詳細になった。文中「三藏取經詩話」に(?)という疑問符があるのは、鉛印本ですであるから書名の正確さに對する疑問であろう。この書はすでに第一三篇4に見えるようにそれぞれ「大唐三藏取經詩話」と「大唐三藏法師取經記」と題する二本がある。「史略」の記述からは、小説『西遊記』が直接「三藏取經詩話」から採つたもののように讀めるが、實際にはその間に相當數の小説や雜劇の存在が考えられるのは現在では常識だろう。

「翻案挪移」 「唐人傳奇」で『異聞集』が引かれるのは、それが李公佐「古嶽瀆經」を収めていたからで、魯迅は孫悟空の原像としてそこに出る無支歧を固執したようで、胡適の主張したハヌマン説は認めなかつたようである。第九篇10稗邊小綴、12胡適「西遊記考證」参照。『酉陽雜俎』については魯迅自身は具體的に言及しない。劉蔭柏編『西遊記研究資料』(一九九〇年上海古籍出版社)は、前集卷十四「諾皋記」上の「天翁」の故事、卷三「貝編」の「玄奘」、卷十六「毛篇」の「羊」を擧げる。

趙景深『中國小説史略傍證』一七五、陳翰『異聞集』是較早的唐人傳奇選本、其中『柳毅』可能曾經吳承恩「翻案挪移」用在『西遊記』第三回上。牛奇章(僧孺)『玄怪錄』中的「元無有」可能脫化成第三十四回后半「木仙庵三藏談

話」。

『西遊記』引用部分　ここでの引用は、本篇6での引用と同じく、第一六篇での『西遊記傳』の引用と對照させてある。文中二箇處の「豎、在後面」のうち、前者は初版、訂正版、十一版、三八年版全集で「豎」に、後者は初版、再版、三八年版全集でそれぞれ「豎」に誤る。『西遊記』諸本の校勘によれば、引用にもっとも近いのは亞東版である。6での引用で二箇處二字が異っている他は、すべて亞東版に一致する。「那猴子、使了个隱身法」の「子」字は、亞東版にないが、他の諸本にもなく、筆誤による衍文だと考えられる。しかし最も問題なのは引用を明記してある「第六回下」以下の回数に上下が附くことである。管見では回数に上下を附けるテキストは未見で、亞東版もそのようには標記しない。「上下」は魯迅が附けたものか、そう作るテキストがあるのかは未詳。地の文で引用する箇處(8)は、すでに寫印本で引かれ、これは亞東版に一致せず、回数にも上下は附かないから、別のテキストに據ったことが分る。

( 3 )

『魯迅藏書目錄』平裝部分、文學・小説云、古本西遊記　明　吳承恩著　汪原放句讀、汪原放・章希呂・余昌之校對  
一九二一年　上海　亞東圖書館　初版　四冊。他に版本の著録はなく、日記にも記録はない。

『師弟答問集』四六頁云、「増田涉問曰」、二〇三頁「小聖施威降大聖」ノ引用文中「掣出那繡花針兒、幌、一幌、碗來粗細、……」〔幌一幌〕一ふり(?) 幌字ノ意如何? (魯迅答曰)、幌||カーテン||布で拵へタ看板。アンナモノハ、大抵ブラ〜動イテ居ルカラ轉ジテ「搖動」○「振ル」ノ意味ニナル、「對於「一ふり」之語」yes

『師弟答問集』四六頁云。「増田問曰」、二〇四頁「……後一事則取雜劇西遊記及華光傳中之鐵扇公主以配西遊志傳中僅見其名之牛魔王、……」〔『西遊志傳』之「志」〕記ノ誤植カ? (魯迅答曰)、yes

寫印本『大略』二二三、作者構思之幻、大都在記八十一難中、而火焰山之戰、尤爲奇恣、其前之猴行者爲小聖所服、雖意匠相肖、然雄健不及也。

鉛印本『大略』の『史略』と異同は、「雜劇『西遊記』及」六字が訂正版で附加された他、「其述牛魔王云々」以下引用文がないことである。『史略』各版間の異同は、初版以來、三十八年版全集に至るまで「西遊志傳」とあつたのが、五七年版全集で「西遊記傳」に正されたこと、又初版で「火焰山火」の下「火」字がなく、合訂再版で補われ、引用文中「騰挪不動」の「挪」が三版より七版まで「挪」に作り、訂正版で舊に復したことである。

楊書、つまり『西遊記傳』及び「四遊記」の『華光傳』と小説『西遊記』との關係は5に於けると同様である。魯迅の考えからすれば、もともと牛魔王と鐵扇公主がカプルであつたのなら、そこから簡略化されたと假定した『華光傳』や『西遊記傳』の中で、その關係の痕跡すらなくなるというのは甚だ合理的でないとするものであつたのだろう。

引用部分 亞東版「魚肚藥叉」の「叉」を「義」に作る。「叉」に作るのは世德堂本、新說光緒影印本である。又亞東版には「掛在老牛的角上」の「老牛」上に「那」字がある。これは世德堂本、李卓吾本、眞詮本、新說光緒影印本、人民文學出版社本等にもある。しかし亞東版は他の諸本に比して異同は極めて少い。

『師弟答問集』四六頁云、「増田問曰」、二〇六頁ノ初メ「火燄山遙八百程、……。火煎五漏丹難熟、火燎三關道不清。右ノ「五漏」と「三關」ノ解釋ハ？ナホ右ノ二句ハ三調芭蕉扇或ハ火燄山ト殆ド無關係ノ句ト思ハレマスガ——詩アツテモ證トナサレナイ（有詩不爲證）ヤウデス、呵呵。コノ詩ハ（火燄山遙八百程ヨリ、水火相聯性自平マデ）全部ヲ、ホンヤクガ面倒ナノデ小生ノ本デハ除刪シヨウト思ヒマスガ、如何？（但、前記ノ二句ガ解レバ再考ス）

〔魯迅答曰〕、火燄山下關係ガアル。ツマリ火（＝人慾）ガ盛ンニナツテ成道ヲ阻礙シタノ意味デス。火ガ五漏ヲ煎ジテ丹（＝道）ガ熟シ難ク、火ガ三關ヲ燎シテ道ガハキリシナクナツタ。五漏ト三關トハ皆ナ身ノ上ノ或ル部分デ、併シ何處デアルカハ僕ニモ知りマセン。五漏トハ鼻ノ孔（ニツ）、口、肛門、陰部ダロー。ナルホド、皆ナヨクナイ處ダ。

7 又作者稟性、以至（第五十一回上「心猿空用千般計」）

一六五—五

寫印本『大略』には、この部分に該當する記述はない。鉛印本で現行の記述となり以後變更はない。ただ「金嶼山、金嶼洞」の讀點のみ合訂再版で加えられた。

「小説的歴史的變遷」第五講云、承恩本善于滑稽、他講妖怪の喜怒哀樂、都近于人情、所以人都喜歡看！這是他的本領。而且叫人看了、無所容心、不象『三國演義』、見劉勝則喜、見曹勝則恨。因爲『西遊記』上所講的都是妖怪、我們看了、但覺好玩、所謂忘懷得失、獨存賞鑒了——這也是他的本領。

胡適「西遊記考證」第七章云、『西遊記』の中心故事雖然是玄奘的取經、但是著者的想像力真不小！他得了玄奘的故事的暗示、採取了金元戲劇的材料（？）、加上他自己的想像力、居然造出一部大神話來！這部書的結構、在中國舊小說之中、要算最精密的了。他的結構共分作三個部分……

第一部分：齊天大聖的傳（第一回至第七回）

第二部分：取經的因緣與取經的人（第八回至第十二回）

第三部分：八十一難的經歷（第十三回至第一百回）

我們現在分開來說：

第一部分乃是世間最有價值的一篇神話文學。我在上文已略考這個猴王故事的來歷。這個神猴的故事，雖是從印度傳來的，但我們還可以說這七回的大部分是著者創造出來的。須菩提祖師傳法一段自然是從禪宗的六祖傳法一個故事上脫化出來的。但著者寫猴王大鬧天宮的一長段，實在有點意思。玉帝把猴王請上天去，却只叫他去做一個未入流的弼馬溫、猴王氣了，反下天宮，自稱「齊天大聖」、玉帝調兵來征伐，又被猴王打敗了。玉帝沒法，只好又把他請上天去，封他「齊天大聖」、「只不與他事管、不與他俸祿」！後來天上的大臣又怕他太閑了，叫他去管蟠桃園。天上的貴族要開蟠桃勝會了，他們依着「上會的舊規」、自然不請這位前任弼馬溫。不料這饞嘴的猴子一時高興，把大會的仙品仙酒一齊偷吃了、攪亂了蟠桃大會、把一座莊嚴的天宮鬧的不成樣子，他却又跑下天稱王去了！等到玉帝三次調兵遣將，好容易把他捉上天來，却又奈何他不得。太上老君把他放在八卦爐中鍊了七七四十九日，仍舊被他跑出來，「不分上下、使鐵棒東打西敲、更無一人可敵、直打到通明殿裏、靈霄殿外！」玉帝發了急，差人上西天去討教，把如來佛請下來。如來到了，詰問猴王，猴王答道：

花果山中一老猿、……因在凡間嫌地窄、立心端要住瑤天。靈霄寶殿非他有、歷代人王有分傳。強者爲尊該讓我、英雄只此敢爭先！

他又說：

他（玉帝）雖年却修長、也不應久住在此。常言道、「交椅輪流坐、明年是我尊。」只教他搬出去、將天宮讓與我、便罷了。若還不讓、定要攪亂、不得清平！

前面寫的都是政府激成革命的種種原因、這兩段簡直是革命的檄文了！美猴王的天宮革命、雖然失敗、究竟還是一個

「雖敗猶榮」的英雄！

我要請問一切讀者、如果著者沒有一肚子牢騷、他爲什麼把玉帝寫成那樣一個大飯桶？爲什麼把天上寫成那樣黑暗、腐敗、無人？爲什麼教一個猴子去把天宮鬧的那樣稀糟？

但是這七回的好處全在他的滑稽。著者一定是一個滿肚牢騷的人，但他又是一個玩世不恭的人，故這七回雖是罵人，却不是板着面孔罵人。他罵了你，你還攪得這是一篇極滑稽、極有趣、無論誰看了都要大笑的神話小說。正如英文的『阿梨思夢游奇境記』(Alice in Wonderland) 雖然含有很有意味的哲學，仍舊是一部極滑稽的童話小說(此書已由我的朋友趙元任先生譯出、由商務出版)。現在有許多人研究兒童文學，我很鄭重的向他們推薦這七回天宮革命的失敗英雄『齊天大聖傳』。(中略)

第三部分(八十一難)是『西遊記』本身。這一部分有四個來源。第一個來源自然是玄奘本傳裏的記載、我們上文已引了最動人的幾段。(中略)。第二個來源是南宋或元初的『唐三藏取經詩話』。金元戲劇裏的「唐三藏西天取經」故事。(中略) 第三個來源是最古的、是『華嚴經』的最後一大部分、名爲「入法界品」的。(中略)

第四個來源自然是著者的想像力與創造力了。上面三個來源都不能供給那八十一難的材料、至多也不過供給許多暗示、或供給一小部分的材料。我們可以說、『西遊記』的八十一難大部分是著者想像出來的。想出這許多妖怪災難、想出這一大堆神話、本來不算什麼難事。但『西遊記』有一點特別長處、就是他的滑稽意味。拉長了面孔、整日說正經話、那是聖人菩薩的行爲、不是人的行爲。『西遊記』所以能成世界的一部絕大神話小說、正因爲『西遊記』裏種種神話都帶着一點詼諧意味、能使人開口一笑、這一笑就把那神話「人化」了。我們可以說、『西遊記』的神話是有「人的意味」的神話。我們可舉幾個例。(中略)

我們在上文會說大鬧天宮是一種革命。後來第五十回裏、孫行者被獨角兇大王把金箍棒收去了、跑到天上、見玉帝。

行者朝上唱個大喏道：

啓上天尊。我老孫保護唐僧往西天取經、……遇一兇怪、把唐僧拿在洞裏要吃。我尋上他們、與他交戰。那怪神通廣大、把我金箍棒搶去。……我疑是天上兇星下界、爲此特來啓奏、伏乞天尊垂慈洞鑒、降旨查勘兇星、發兵收剿妖魔、老孫不勝戰慄屏營之至！

這種奴隸的口頭套話、到了革命黨的口裏、便很滑稽了。所以殿門傍有葛仙翁打趣他道：

猴子、是何前倨後恭？

行者道：

不是前倨後恭、老孫於今是沒棒弄了。

這種詼諧的裏面含有一種尖刻的玩世主義。『西遊記』的文學價值正在這裏。第一部分如此、第三部分如此。又參看 8 引

第八章：『胡適文存二集』卷四。

引用文は亞東版とは齟齬を來さない。

8 評議此書者、以至皇圖永固（十三回）而已

一六十二

寫印本『大略』二二云、評議此書者有清人悟一子西遊真詮與悟元道人西遊原旨、皆闡明理法、文詞甚繁。實則全書大旨、無非以猿表心、以馬表意、以心制馬與魔、而又以緊箍制心、心滅魔滅、乃得真如。謝肇淛云、「西遊記曼衍虛誕、而甚縱橫變化、以猿爲心之神、以豬爲意之馳、其始之放縱、上天下地、莫能禁制、而歸于緊箍一呪、能使心猿馴伏、至死靡他、蓋亦求放心之喻、非浪作也」（五雜俎）數語已足盡之。作者亦自云、「衆僧們燈下議論佛門定旨、上西天取經的原由、……三藏箝口不言、但以手指自心、點頭幾度。衆僧們莫解其意、三藏道、心生種種魔生、心滅種種魔滅、



我弟子曾在化生寺對佛說下誓願、不由我不盡此心、這一去、定要到西天、見佛求經、使我們法輪回轉、皇圖永固」(第十三回)也。惟緣明人之言心性、已多混三教爲一談、故釋迦與老君同流、真性與元神錯出、又以八卦通之易經、而附會于儒術矣。

鉛印本『大略』は「流行來久」の「來」を「未」に誤り、「作者所說」の「所說」を闕く他、「亦第云」の「第」を寫印本に同じく「自」に、また文末の「而已」も同じく「也」に作る。『史略』初版は「莫能禁制」の「能」を脱す。

「小説的歴史的變遷」第五講云、至于說到這書的宗旨、則有人說是勸學、有人說是談禪、有人說是講道、議論很紛紛。但據我看來、實不過出于作者之遊戲、只因爲他受了三教同源的影響、所以釋迦、老君、觀音、真性、元神之類、無所不有、使無論甚麼教徒、皆可隨宜附會而已。如果我們一定要問它的大旨、則我覺得明人謝肇淛所說的「『西遊記』……以猿爲心之神、以豬爲意之馳、其始之放縱、上天下地、莫能禁制、而歸于緊箍一咒、能使心猿馴伏、至死靡他、蓋亦求放心之喻。」這幾句話、已經很足以說盡了。

胡適「西遊記考證」第八章云、「西遊記」被這三四百年來的無數道士和尚秀才弄壞了。道士說、這部書是一部金丹妙訣。和尚說、這部書是禪門心法。秀才說、這部書是一部正心誠意的理學書。這些解說都是「西遊記」的大仇敵。現在我們把那些什麼悟一子和什麼悟元子等等的「真詮」「原旨」一概刪去了、還他一個本來面目。至於我這篇考證本來也不必做、不過因爲這幾百年來讀「西遊記」的人都太聰明了、都不肯領略那極淺極明白的滑稽意味和玩世精神、都要妄想透過紙背去尋那「微言大義」、遂把一部「西遊記」罩上了儒釋道三教的袍子。因此、我不能不用我的笨眼光、指出「西遊記」有了幾百年逐漸演化的歷史、指出這部書起於民間的傳說和神話、並無「微言大義」可說、指出現在的「西遊記」小說的作者是一位「放浪詩酒、復善諧謔」的大文豪做的、我們看他的詩、曉得他確有「斬鬼」的清興、而決無「金丹」

的道心、指出這部『西遊記』至多不過是一部很有趣味的滑稽小說、神話小說、他並沒有什麼微妙的意思、他至多不過有一點愛罵人的玩世主義。這點玩世主義也是很明白的、他並不隱藏、我們也不用深求。十二、二、四改稿（『胡適文存二集』卷四）。

尤侗「陳士斌西遊真詮序」云、三教聖人之書、吾皆得而讀之矣。東魯之書、存心養性之學也。函關之書、修心鍊性之功也。西竺之書、明心見性之旨也。此心與性、放之則弥於六合、卷之則退藏於密、其揆一也。而莫奇於佛說。吾嘗讀華嚴一部而驚焉。一天下也、分而爲四。一世界也、累而爲小千中千大千。天一而已、有切利夜摩諸名。地一而已、有歡喜離垢諸名。且有輪圍山、香水海、風輪寶燄、日月雲雨、宮殿園林、香花鬘蓋、金銀琉璃、摩尼之類、無數無量無邊、至於不可說、不可說、總以一言蔽之、曰一切惟心造而已。後人有西遊記者、殆華嚴之外篇也。其言雖幻、可以喻大、其事雖奇、可以證真。其意雖遊戲三昧、而廣大神通具焉。知其說者、三藏即菩薩之化身、行者八戒沙僧龍馬、即梵釋天王之分體、所遇牛魔王虎力諸物、即阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽之變相。由比觀之、十萬四千之遠、不過一由旬十四年之久、不過一刹那。八十一難、正五十三參之反對、十五部亦四十二字之餘文也。蓋天下無治妖之法、惟有治心之法、心治則妖治、記西遊者、傳華嚴之心法也。雖然吾於此有疑焉。夫西遊取經、如來教之也。而世傳爲丘長春之作、元史丘處机傳、稱爲神仙仙宗伯、何慕乎西遊。豈空々玄々有殊塗同歸者耶。然長春微意、引而不發。今有悟一子陳君、起而詮解之、於是鉤參同之機、抉悟真之奧、收六通於三寶、運十度於五行、將見修多羅中有爐鼎焉。優曇鉢中有梨棗焉。阿闍黎中有嬰兒姪女焉。彼家探戰、此家燒丹、皆波旬說、非佛說也。佛說如是奇矣、更有奇者、合二氏之妙而通之於易、開以乾坤、交以離坎、乘以姤復、終以既濟未濟、遂使太極兩儀、四象八卦、三百八十四爻、皆會歸於西遊一部。一陰一陽、一闢一闢、其爲變易也、其爲不易也、吾烏乎名之哉。然則奘之名玄也、空能靜之名悟也。兼佛老之謂

也。舉夫子之道、一以貫之。悟之所以貞夫一也。然老子曰、道生一。佛子曰、萬法歸一。一而三、三而一者也。以悟一之書告之三教聖人、必有相視而笑者。昌黎有云、老者曰、孔子吾師之弟子也、佛者曰、孔子吾師之弟子也。孔子者習聞其說、亦曰、吾師亦嘗師之云尔。吾師乎、吾不知其爲誰乎。若悟一者、豈非三教一大弟子乎。吾故曰、能解西遊記者、聖人之徒也。

康瀨丙子中秋西堂老人尤侗撰。乾隆四十五年庚子刊本（古本小說集成本）。

清代を通じて最もよく讀まれたとされるのがこの『西遊眞詮』である。靜嘉堂が藏する『眞詮』には悟一子陳士斌の康熙甲戌（三三年、西紀一六九四）の自序があり、原刊本であろうと推定されているが、以後の版本にはこの自序がない。魯迅は尤侗の序にしか言及しないので、彼が見たのは少なくとも原刊本ではない。尤序によれば三教一流の理を明らかにするのが本書の主旨だということになる。

張書紳「西遊記總論」云、予幼讀西遊記、見其奇奇怪怪、忽而天宮、忽而海藏、忽說妖魔、忽說仙佛、及所謂心猿意馬、八戒沙僧者、茫然不知其旨。嘗問人曰、西遊記何爲而作也。說者曰、是講禪也、是談道也。心疑其說、而究未明確其旨。及游都中、乃天下人文之匯、高明卓見者、時有其人。及聆其議論、仍不外心猿意馬之舊套、至心猿意馬之所以、究不可得而知也。迄今十餘年來、予亦自安於不知、而不復究論矣。乙丑年、由都歸省、值呈安天會、觸目有感、恍然自悟曰、是矣、是矣、予今而知西遊記矣。予今而并知作西遊記者之心矣。自古聖賢、悲憫後世、爲之著書立言、不一其旨、而其心總欲人歸於至善也。故孔子之贊詩曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪。予今批西遊記一百回、亦一言以蔽之、曰只是教人誠心爲學、不要退悔。此其大略也。至於逐段逐節、皆寓正心修身、黽勉警策、克己復禮之至要、實包羅天地萬象、四海九洲、士農工商、三教九流、諸子百家、無非一部西遊記也。以一人讀之、則是一人爲一部西遊

記、以士農工商、三教九流、諸子百家、各自讀之、各自有一部西遊記、務必遷善改過、以底於至善而後已。若是乎、西遊之有裨於天下後世、四海九州、士農工商、三教九流、諸子百家也。豈淺鮮哉。總之心不誠者、西天不可到、至善不可止。作者有感於此、而念世人至多、其端又不一、故不能一一耳提面命以教之。又不能各爲一書以教之、故作西遊記、使各自讀之、而各自教之也。乾隆戊辰年秋七月晉西河張書紳題。(古本小說集成本)

張書紳「自序」云、此書由來已久、讀者茫然不知其旨。雖有數家批評、或以爲講禪、或以爲談道、更又以爲金丹採煉。多捕風捉影、究非西遊之正旨。將古人如許之奇文、無邊之妙旨、有根有據之學、反目爲荒唐無益之譚、良可嘆也。予欲以數月之暇、註明指趣、破其迷網、喚醒將來之學者、此亦往者之可諫、來者之猶追也。不知有當否。西河張書紳題  
(同上)

「史略」は張書紳の序のあるこの書を「西遊正旨」とする。これは本來「新說西遊記」を元とする亞東圖書館版が、所據の版本を「西遊正旨」としたための誤りで、正しくは「新說西遊記」としなければならぬ。「西遊正旨」は正式には「通易西遊正旨」と題する別本である。「乾隆戊辰序」とは前に舉げた「西遊記總論」を指す。張書紳の「自序」には年月日を記さない。しかし「史略」が「談禪、講道」云々と言うのは張序の文辭を襲った形跡がある。「序」や「總論」に述べる所からすれば、この書は儒者の立場からの解釋を試みたもので、史略の言う「勸學」に相當する。なお『新說西遊記』は清刊の他の諸本に比すれば、明刊の世德堂本等に近い、省略の少い文繁本だということである。乾隆己巳(一四年、西紀一七四九)晉省書業公記藏版本、其有堂刊本、善成堂刊本、校經山房石印本、近くは亞東排印本、また西遊記專輯(民國七四年臺灣天一出版社景印)本、書業記藏版本と其有堂本に似る古本小説集成景印上海古籍出版社藏本等がある。太田辰夫「清刊本西遊記考」(『神戸外大論叢』第二二卷四號・昭四六)參照。

劉一明「西游原旨再序」云、原旨一書、脫稿三十餘年矣。其初固鎮瑞英謝君即欲刻刊行世。余因其獨力難成、故未之許。嘉慶二年、乃郎思孝思弟欲了父願、摘刻讀法、並結詩一百首、已編於指南針中矣。然其意猶有未足也。丙寅秋月、古浪門人樊立之游宦歸里、復議付梓、謝氏兄弟、亦遠來送資。時有烏蘭畢君爾德、洮陽劉君煜九、陽峰白子玉峰、一時不謀而合、聞風幫助。余亦不得如其願、爰是付梓、使初學者閱之、便分邪正、庶不爲旁門曲徑所誤矣。

時大清嘉慶十五年歲次庚午春月素樸散人再叙。(嘉慶二十五年庚辰(一八二〇)湖南常德府護國菴重刊本景印、古本小說集成本)

『史略』の言う嘉慶十五年の「再序」は、この書が上梓にこぎつけるまでの経緯を述べるだけのものであって、内容や解釋の立場には及ばない。なぜ次に引く乾隆戊寅(西紀一七五八)の序を挙げなかったのか、その間の事情については未詳。

劉一明「西游原旨序」云、西遊記者、元初長春邱眞君之所著也。其書闡三教一家之理、傳性命双修之道。俗語常言中、暗藏天機。戲謔笑談之處、顯露心法。古人所不敢道者、眞君言之、古人所不敢泄者、眞君泄之。一章一篇、皆從身體力行處寫來。一辭一意、俱在眞履實踐中發出。其造化樞紐、修真窮妙、無不詳明且備。可謂拔天根而鑽鬼窟、開生門而閉死戶、實還元返本之源流、歸根復命之階梯。悟之者在儒即可成聖、在釋即可成佛、在道即可成仙。不待走十萬八千之路、而三藏眞經可取。不必遭八十一難之苦、而一觔斗雲可過。不必用除魔降怪之法、而一金箍棒可畢。蓋西天取經、演法華金剛之三昧。四衆白馬、發河洛周易之天機。九九歸眞、明參同悟眞之奧妙。千魔百怪、劈外道旁門之妄作。窮歷異邦、指腳踏實地之工程。三藏收三徒而到西天、能盡性者必須至命。三徒歸三藏而成正果、能了命者更當修性。貞觀十三年上西、十四年回東、眞下有還原之秘要。如來造三藏眞經、五聖取一藏傳世、三五有合一之神功。全部要旨、正在於此。其有裨於聖道、啓發乎後學者、豈淺鮮哉。憺漪道人汪象旭、未達此義、妄議私猜、僅取一葉半簡、以心袁

意馬畢其全旨、且註脚每多戲謔之語狂妄之詞。嗚、此解一出、不特埋沒作者之苦心、亦且大誤後世之志士、使千百世不知西遊爲何書者、皆自汪氏始。其後蔡金之輩、亦遵其說而附和解註之。凡此其遺害、尙可言乎。繼此或目爲玩空、或指爲執相、或疑爲闡丹、或猜爲吞嚙。千枝百葉、各出其說、憑心造作、奇奇怪怪、不可枚舉。此孔子不得不哭麟、下和不得不泣玉也。自悟一子陳先生心眞詮一出、諸僞顯然、數百年埋沒之西遊、至此方得釋然矣。但其解雖精、其理雖明、而於次第之間、仍未貫通、使當年原旨不能盡彰、未免盡美而未盡善耳。予今不揣愚魯、於每回之下、再三推敲、細微解釋。有已經悟一子道破者、茲不復贅、有遺而未解、解而未詳者、逐節釋出、分晰層次、貫串一氣。若包造藏卦象、引證經書處、無不一一註明。俾有志於性命之學者、原始要終、一目了然、知此西遊、乃三教一家之理、性命又修之道、庶不惑於邪說淫辭、誤入外道旁門之塗、至於文墨之工拙、則非予之所計也。

時在乾隆戊寅孟秋三日檢中棲雲山素樸散人悟元子劉一明自序。嘉慶二十五年湖南常德府護國庵重刊本。(上海古籍出版社古本小說集成本)不明之處、以『中國歷代小說序跋集』(一九九六・人民文學出版社)補。

序文中で「三教一家之理」を闡明するものと言うが、劉一明は『道書十二種』の編著者であるから、この書は道教の立場から『西遊記』について「三教一家之理」を説くもので、『史略』の言う「講道」に當るだろう。近刊のテキストには西遊記專輯本(民國七四年臺灣天一出版社景印本)、古本小説集成本がある。なお「談禪」のみを主張するのは未詳。以上『史略』が擧げる書の他清刊のテキストとしては次のものがある。

『通易西遊正旨』 清張含章撰、何延椿序、又無名子(張含章)序並びに跋(序跋は朱一玄等編『西遊記資料滙編』(一九八三・中州書畫社)等に見ることができる)。張含章の跋によれば「竊擬我祖師託相作西遊之大義、乃明示三教一源。故以周易作骨、以金丹作脈絡、以瑜迦之教作無爲妙相云々」と言い、『易』に附會して『西遊記』を解釋し

ようにするもの。見られるテキストには、前十回を缺くが、国立政治大學古典小説研究中心編「西遊記專輯」本がある。さきの『西遊記資料滙編』等は清道光己亥（十九年）眉山何氏德馨堂刊本に據るとする。「西遊記專輯」本がそれと同じ版本であるかどうかは未詳。本文は『西遊證道書』の系統のものである。

『西遊記評注』 清含晶子撰 光緒辛卯（十八年）刊本。含晶子の序はさきの『西遊記資料滙編』等に見える。本文は『西遊眞詮』の系統のものであるという。（太田辰夫「清刊本西遊記考」『神戸外大論叢』第二二卷第四號・昭和四六參照）

「荒唐無稽之經目」 本篇4參照。

「眞性和元神」 「眞性」は佛教用語で不妄不變を言い、「元神」は道教用語で靈魂を言う。

謝肇淛『五雜俎』十六 全文は第十六篇4に已引を參照。「史略」が『西遊記』は「此書則實出於遊戲」と言いながら、「假欲勉求大旨」と留保をつけつつ、結局『五雜俎』の「放心之喩」を引くのは矛盾である。これは寫印本『大略』ですでに謝肇淛のこの議論を引いており、鉛印本で「遊戲」説を持ち出した時にも尾を曳いたということも考えられるが、根本的には『西遊記』そのものが種々の解釋を本質的に許容できるような性質を持っていたこと、そして清代の讀書人がそうしたイデオロギーを小説に読み込まないではこの作品を讀めなかったという讀書史を、さらにもた魯迅も讀書人の一人としてそうした尾っぽを引張っていたことを語るものである。

『西遊記』引用部分 表示された回数に「上下」の別がないことから、上での引用とは據るテキストが異なるということはすでに述べた。諸本との校對の結果、「三藏道」の「道」上に「答」字がないこと、「誓願」を「洪誓大願」と四字に作らないこと、「皇圖永固」の上に「願聖主」三字がないことなどから、引用文は『西遊眞詮』に最も近い。

『師弟答問集』四八頁云、〔増田問曰〕、二〇八頁 二行 『心ガ生ズレバ種種ナル魔ガ生ジ、心ガ滅スレバ種種ナル魔ガ滅ス……』？〔魯迅答曰〕、yes ツマリ心ガ動ケバ魔モツイテ起ルトノ説。「境ハ心ニ由リテ造ラレル」トノ説ニ同ジトデス。〔就「種種」之語〕many? ……? [varied? 判讀不能] 〔「種種」之解、消去many、而對於判讀不能語〕yes

『後西遊記』、以至尤爲蛇足也

一六七十四

寫印本『大略』一二云、又有『後西遊記』者、記三藏及孫悟空等後裔、復入西天求經事、乃惟模仿前記而已。この記述の前に『西遊補』についての言及があるが、それは第一八篇に譲る。

鉛印本『大略』一六明之神魔小説云、『後西遊記』則敍玄奘等後裔、又赴天竺求經、復遇諸魔難事、悉摹前書、更無新意、辭亦不上、以吳承恩詩文之清綺推之、必非所作矣。

『續西遊記』についての記事はまだない。『史略』各版の間に異同はない。

「小説的歴史的變遷」第五講云、後來有『後西遊記』及『續西遊記』等、都脱不了前書窠臼。至董說的『西遊補』、則成了諷刺小説、與這類沒有大關係了。

劉廷璣『在園雜誌』三云、近來詞客稗官家、每見前人有書盛行于世、即襲其名、著爲後書副之、取其易行、竟成習套。有後以續前者、有後以證前者、甚有後與前絕不相類者、亦有狗尾續貂者。四大奇書、如三國演義、名三國志、竊取陳壽史書之名。東西晉演義、亦名續三國志、更有後三國志、與前絕不相伴。如西遊記、乃有後西遊記續西遊記。後西遊雖不能媲美于前、然嬉笑怒罵、皆成文章。若續西遊、則誠狗尾矣。更有東遊記南遊記北遊記、眞堪噴飯耳。中略。總之、作書命意、創始者倍極精神、後此縱佳、自有崖岸、不獨不能加于其上、即求媲美並觀、亦不可得。何況續以狗尾、



自出下下耶。演義小説之別名、非出正道、自當凜遵諭旨、永行禁絶。遼海叢書本。

「續西遊補雜記」云、「續西遊」摹擬逼真、失于拘滯、添出比丘靈虛、尤爲蛇足。「後西遊」瀟灑飄逸、不老婆婆一段、借外丹點化、生動異常、然小行者小八戒未免窠臼。後略。

この標題は意味不通だが、「續」は「讀」の誤刻なのだろう。「西遊補」崇禎間原刊本に附いていたものではなく、文中に鈕玉樵「觚賸續編」、「四庫總目」、「守山閣叢書」等が出るので、清も嘉慶道光期以後の人物の手になるものである。北新書局版「西遊補」の「雜記」の病禪の附識は、「雪枝從父」という語から錢熙祚の弟、熙輔の息子であろうとするが、人物は特定できない。魯迅が『西遊補』に附録するこの文章を見た経緯は未詳だが、一九二四年一月五日の「日記」に「下午寄胡適之信并文稿一篇、『西遊補』兩本。」とある、そのテキストにちがいない。

「孫目」五云、後西遊記四十回 存 大連圖書館藏本、題「繡像傳奇後西遊記」「本衛藏板」 清乾隆癸丑（五十八年）金閶書業堂刊本。 清同光元年貴文堂重刊大字本、圖二十頁、半葉九行、行二十一字。旁加評、有無名氏長序。上海申報館排印本、序同貴文堂本。清無名氏撰、題「天花才子評點」。此書在園雜誌卷三引、則作者清初人也。

「在園雜誌」卷三云、如「西遊記」乃有「後西遊記」「續西遊記」。「後西遊」雖不能媲美於前、然嬉笑怒罵皆成文章、若「續西遊」則誠狗尾矣。」按、「續西遊記」、清袁文典「滇南詩略」以爲明蘭茂撰、云、「所言乃佛氏要旨、而取世所謂邱翁『西遊記』所經之事、續其東還所歷、與梅子和『後西遊記』別是一種。」（卷二「蘭茂傳」眉批茂字廷秀、號止庵、別號和光道人、雲南嵩明州人、洪武三十年生、成化十二年丙申卒、年八十）彪文如先生謂毛奇齡「西河合集」中有「季跪小品制文引」一文、稱嘗見季跪座中譚義鋒芒、齊諧多變。及窺其所著、則一往譎嚮、言至今讀「西遊續記」、猶舌橋然不下云云。則作者明末人。非茂也。季跪始末俟考。「詩略」所稱梅子和、今亦不知爲何人。

近刊には「西遊記專輯」に、孫目の言う「天花才子評點」本が影印され、同じ版本によると考えられるものに、于植元校點春風文藝出版社明末清初小説選刊本（一九八二）がある。他に徐元校點の浙江文藝出版社本（一九八五）があり、これは光緒二十年（一八九四）東琴書室石印本を底本とし、一九三四年上海大達圖書供應社本と上記の春風文藝出版社本を參校したとする。

『孫目』五云、續西遊記一百回 存 清同治戊辰漁古山房刊本、封面題「繡像批評續西遊真詮」、半葉十行、行二十四字。首眞復居士序、有圖。

明人撰。『西遊補』所附雜記云、「『續西遊』摹擬逼真、失於拘滯、添出比丘靈虛、尤爲蛇足。」

近刊にはこの同治戊辰（同治七年・一八六八）漁古山房刊本による張穎・陳速校點春風文藝出版社明末清初小説選刊本（一九八六）がある。

(二〇〇二・九・二〇)